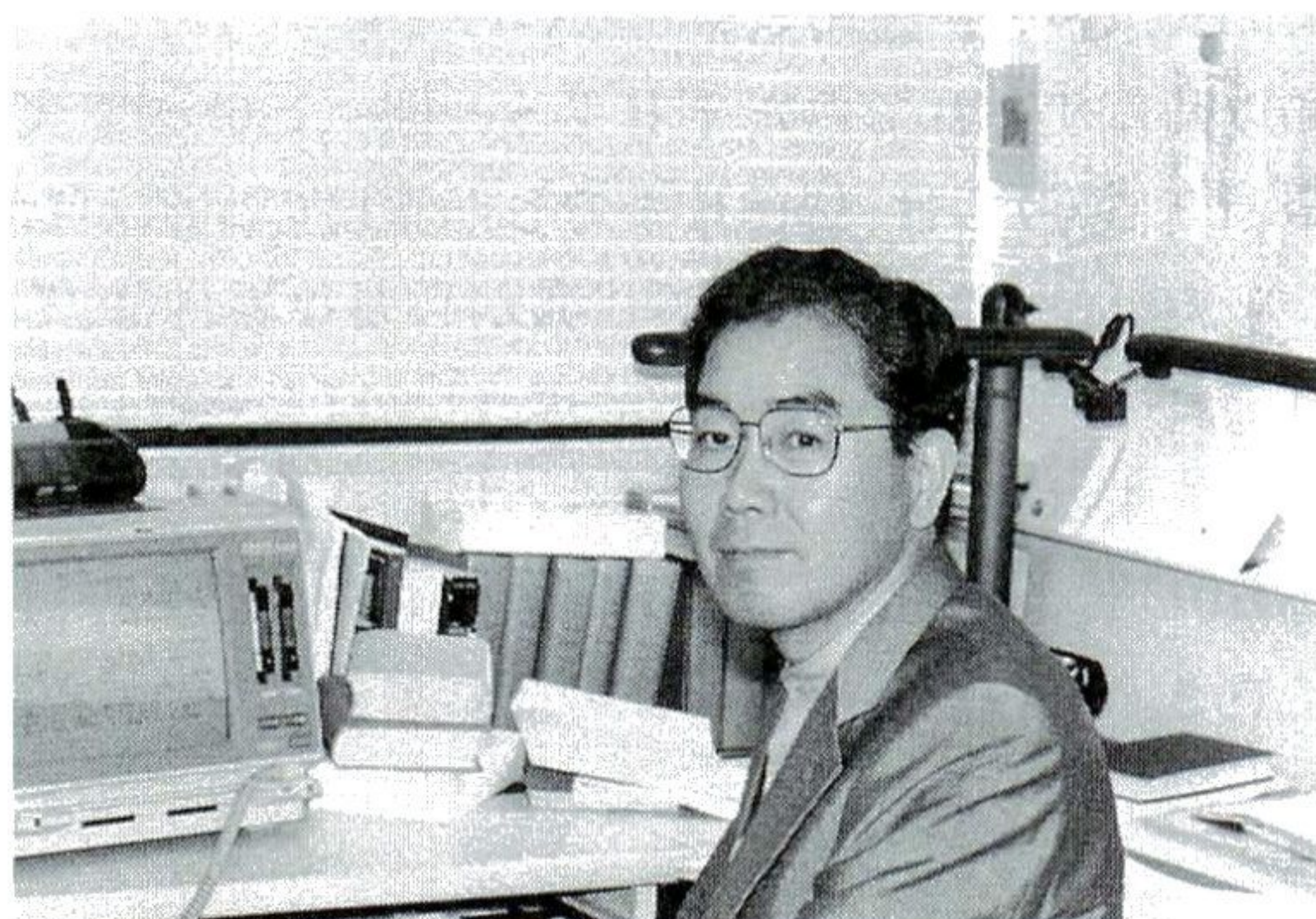




## ある一人の思想家を追う

— 里見研究室～外国語群(フランス語) —



里見 達郎 助教授

いうまでもなく、この東京工業大学は理工系の大学である。したがっておよそ500ある研究室のほとんどで理工系の研究が行われている。しかし、この大学にも理工系以外の研究室が存在することを御存知であろうか。ひとつは人文社会科学群であり、もうひとつが語学の研究室である。

理工系の研究室ならば、皆さんが現在、勉強していることに近いので、多少は馴染みがあるだろう。しかし、語学の研究室とは、1、2年の語学の授業のときぐらいしか接する機会がなく、研究内容を知っている学生は少ないだろう。

そこで、今回はその中でフランス語の里見助教授の研究室を訪問させて頂いた。



## 里見先生とバタイユ——研究は果てしなく

我々が里見先生の研究室に入ってまず目に入っただのは、研究室の壁という壁を埋めつくすかのような膨大な蔵書であった。その本棚には、フランス文学関係はもちろん、禅の本まで並んでおり、取材に行った我々は圧倒された。その本棚の奥に『ジョルジュ・バタイユ全集』と書かれた十二巻の洋書があった。これが、里見先生の研究素材なのである。

最初に、「ジョルジュ・バタイユ」との出会いについてうかがうと、先生はこう語られた。

「高校時代、コリン・ウィルソンの『アウトサイダー』と言う本に影響を受けまして——『アウトサイダー』というのは、世の中で異端と見なされている作家と思想家ばかりをとりあげ、彼らがなぜ受け入れられないのか、何を人と違った世界として主張しようとしているのか、論じていったもので——その中にウィトゲンシュタインやニーチェ、ブレイクなどがいました。彼らの延長上でバタイユに出会ったのです。そのバタイユの著書を最初に読んだとき、深い衝撃と同時に、つかみ難

い奇妙な魅力を感じました。そして、その魅力の謎を解こうとしているうちに、今日まで来てしまいました。それは、良くも悪くも運命的な出逢いと言いか言いようがないんです」

このように先生はバタイユと出逢い、現在に至るまで研究を続けてきた。ところでひとくちに研究というが、文科系の研究は、理工系の研究とはかなり違うということに注意したい。東工大におかれる多くの理工学の先生方は、研究のテーマ、目的、装置、そして方法などが明確で具体的なものを研究している。一人の作家や思想家を研究する場合も、確かに作品や書物という、一見、明確な対象があるかのように見える。だが、里見先生に言わせれば、その作品や書物は、文化や伝統、影響関係の糸が複雑に絡み合った巨大な織物の一部に過ぎなく、そしてその織物は始まりも終わりも無限に広がっているのだそうである。

その研究の結果、里見先生はバタイユに関する論文をいくつか出しているが、けっして彼の全てをつかめたわけではない。特にバタイユの思想は

パラドックスに富んでいて、通常の意識のあり方を否定した所にその究極的な到達点を置いているため、体系化するという研究はいつそう困難になってくる。しかし、それを可能な限り言葉にしようと先生は努力なさっているのである。

そして、そのような努力は何のためであるかと問うと、「何のためでもありません。人間にとって最も価値のあるものは、全て無目的なものではないでしょうか。そして、この無目的ということは、バタイユの思想の核心にある「至高性」というキー・ワードに、直接かかわってくるのです」と先生は答えられた。



## 至高性——知の頂点、そして盲点

バタイユはひとつの狭い学問分野に収まりきれない百科全書的な思想家である。主著『無神学大全』に見られるような「神なき神秘家」でありながら、『眼球譚』のようなたいへんショッキングな作品を書いた小説家でもあり、またマネやラスコーの洞窟壁画などを論じた美術史家であると同時に、『呪われた部分』で独創的な経済論を展開した経済学者でもある。しかし彼は、それぞれの分野

で別々のことを論じているわけではなく、ある一つの頂点を目指していた。それが「至高性」なのである。彼のいう至高性は、知の頂点であるが、しかし全てを見る目が自分自身だけは見ることができず、全てを指し示す指が自分だけは指し示すことができないように、逆説的に知の盲点ともなり「非知」となるものである。

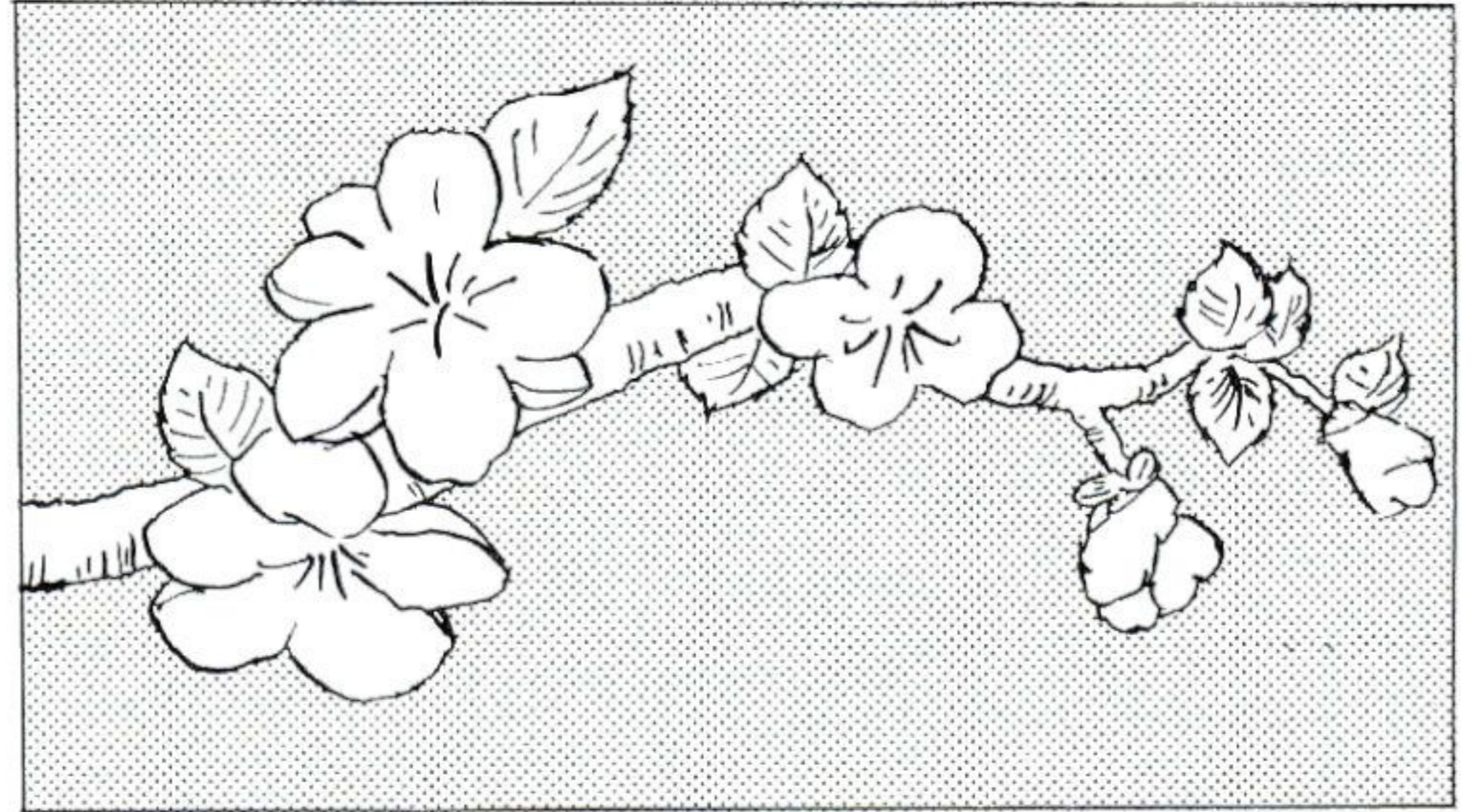
では、至高性とはいったい何であろうか。『呪

ジョルジュ・バタイユ (1897.9.10-1962.7.8)

フランスのオーヴェルニュ地方生まれの作家・思想家。彼は、神への信仰を捨て、ヘーゲルの「絶対知」の完成も否定したニヒリズムの荒野を、自ら徹底的に生き抜くことによって超克した点で、まさにニーチェの後継者である。性と死の妄執に満ちた作品のため、「神の死に苦悩するニヒリスト」と見られがちだが、実は「大いなる遊戯」の至福のヴィジョンを説き、人間の本来的な「至高性」をめざす「神なき神秘家」であった。現代の最も重要な作家の一人と評されながらも、光と闇、深い宗教的な肯定とダダ的否定、そして脱領域的な広い知的探究と「非知」の両極が一致する逆説的世界ゆえに、彼の作品は今なお孤絶している。

主著に『無神学大全』(全3巻)がある。それは無数の断片からなる思索ノートで、十字架のキリストに代えて中国人の死刑囚の写真を瞑想するような神の神秘体験の記録なのである。その「主体の供犠」の実践を通じて、彼は存在の「透明性(連続性)」、人間の「友愛」に導かれる。また、友人の物理学者と、地表上のエネルギーの運動量を計算しようと試み、経済論『呪われた部分』において、過剰エネルギーの使い道による社会の構造や歴史の変化を説明してみせる。その他、評論集として『文学と悪』、『エロティシズム』や、小説『眼球譚』、『C神父』、『青空』、そして美術論『マネ』、『ラスコーあるいは芸術の誕生』など、様々な分野に渡って著作活動をしている。

われた部分』で彼は、地球上に過剰エネルギーが存在するという前提に立って、その過剰なエネルギーの非生産的消費を重視する「普遍経済学」を提唱したが、至高性とは、単純にいうと、この過剰エネルギーの無目的な消費のことだといっても良いものである。しかし、それは本来、無目的なものであるがゆえに「非知」となってしまうのである。



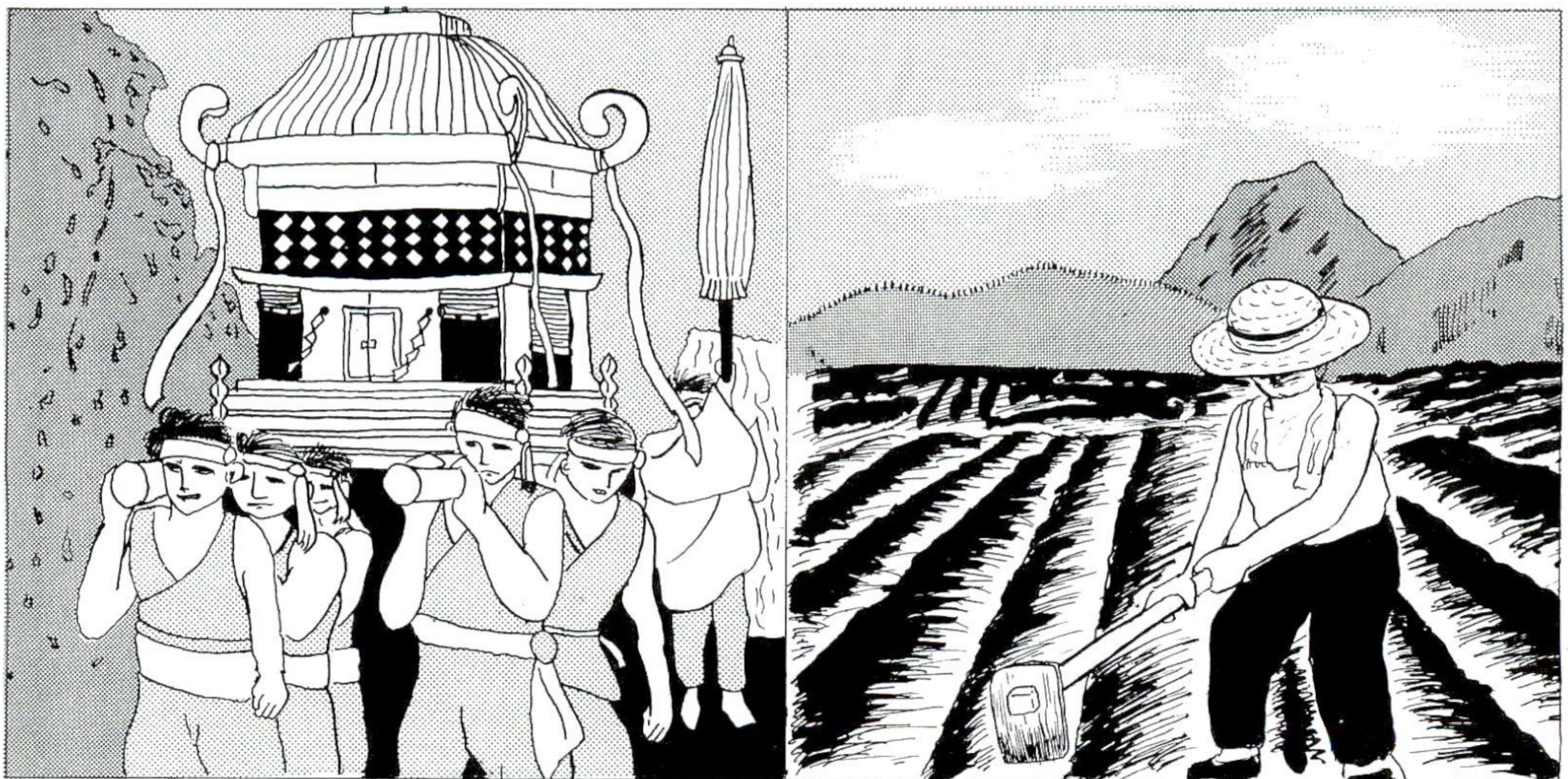
## 供犠——非生産的消費と存在の復元

この至高性というものを考えるにあたって、前述の非生産的消費の例として、「供犠」という奇妙な制度があげられる。かつて世界各地の多くの宗教において、家畜などの動物や収穫した作物、時には人間を「いけにえ」に捧げるといふ儀礼が行われてきた。いずれにしても普段意味を持っているものが、功利性、利益、目的から離れたところで破壊されている。そのような浪費ともいえる行為がどうして行われたのだろうか。

これを説明するために、宗教学でいう「聖なるもの」と「俗なるもの」といった二元論を用いてみよう。普段労働したり社会の規範を守る、そういった「俗なる時間」と、それに対してお祭りなどを行う「聖なる時間」の2つに我々の時間は、かつて分けられていた。そして、「聖なる時間」では「俗なる時間」で蓄えてきた物を消費してしまう。その頂点として「供犠」が存在すると考える

と、一見無駄で残酷な行為に見えるが、実は、俗なる労働の時間において意味、目的、功利性に縛られている存在を聖なる存在へ戻していることになるのである。それは本来の価値を復元して聖なる物として、見直しているのだ。神に捧げるとか、豊作を祈るといった口実は二義的なものにすぎない。耕作でこき使われていた牛が、お祭りで飾られて「いけにえ」にされるとき、牛そのものが神聖な存在と化しているのだ。

もちろんこうした儀礼は、宗教が合理化され、原初的な荒々しさを失うにつれて行われなくなった。そのとき、宗教的儀礼にかわり祝祭の場、供犠の場となったのが、様々な芸術ジャンルなのである。直接の祝祭的起源を持っている演劇はもちろんのこと、歌や舞踏、また詩も、非生産的消費のさまざまな形のひとつとして、広い意味での供犠と見なすことができる。



多少飛躍しているかもしれないが、バタイユは「詩」というのは「言語の供犠」なのだという。日常のコミュニケーションにおいて言葉は人に用事を頼んだり、自分の考えを伝えるといった使われ方をされ、用事がすめば使い捨てられている。それが「詩」の中においては、言葉のリズムや味わいそのものが重要で、それ自体が神聖なものに

変えられているのである。

またバタイユにとって重要なエロティシズムも「肉体の供犠」と考えることができる。エロティシズムにおいて肉体は、日常の働いて生産しているときのような、功利性な目的の道具ではなくなっているわけである。このように、対象が変わっても供犠の基本的な構造は同じである。

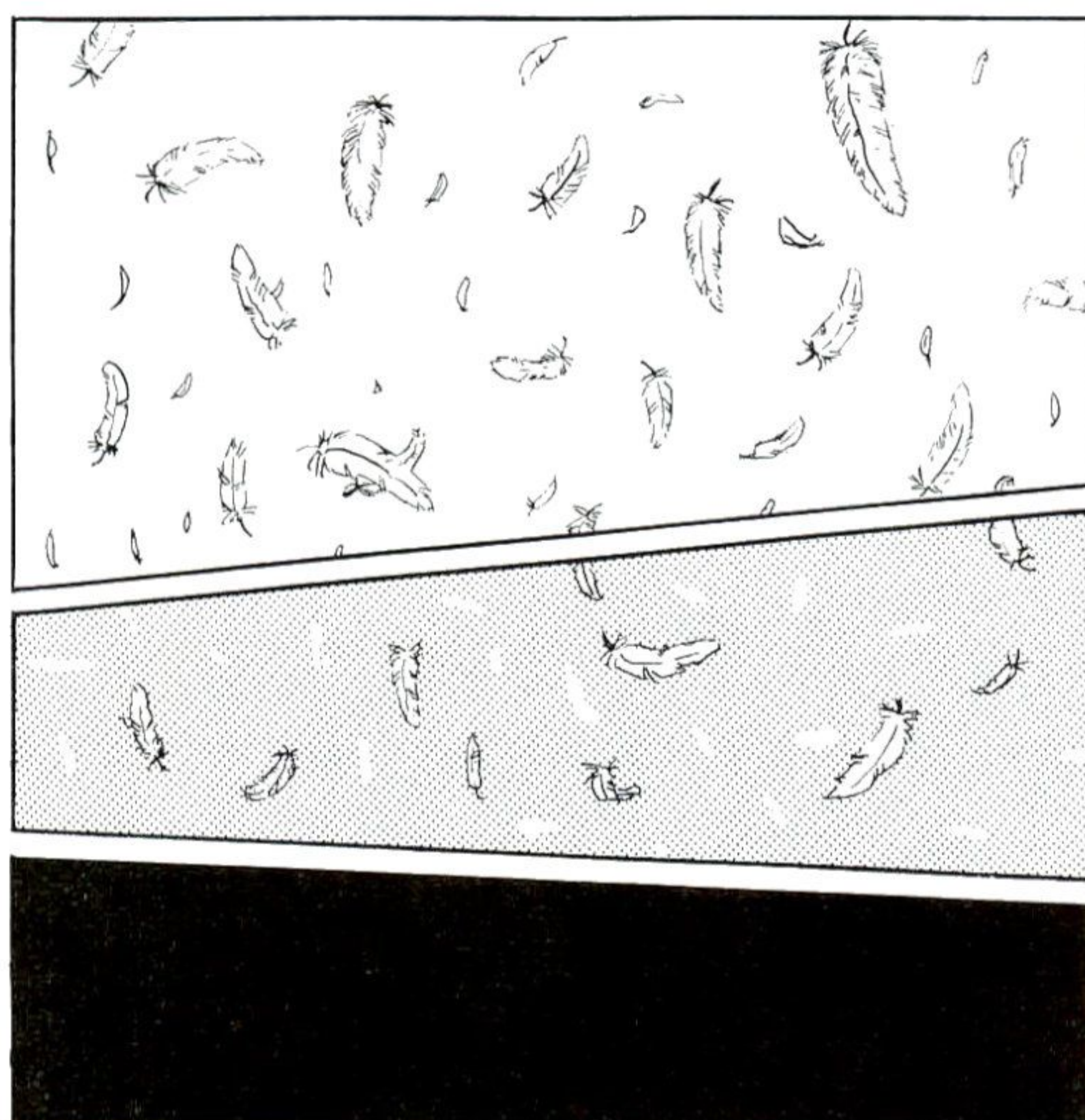


## 内的体験——瞑想の果て、至高性との邂逅

ところで、いままで述べてきた供犠には、例えば牛という存在、言葉、肉体などの対象、すなわち客体があった。つまり、これらは全て「客体の供犠」なのである。しかし、至高性を実現し、自覚するには十分でなく、「主体の供犠」を実践しなければならないと、バタイユは述べている。主体とは、要するに自分自身のことである。その主体は日常、功利性な目的、意味、因果関係にしばられている。十全な至高性の自覚にいたるには、この主体のあり方そのものを転倒し、言葉さえも捨てて、みずから非知のまっただなかに飛び込まなければならない。これを、バタイユは「主体の供犠」と呼んでいるのである。

では、具体的にどういったことで、「主体の供犠」が実現されるのか、それが、バタイユのいう「内的体験」なのである。内的体験とは、いわゆる「瞑想」——ただし既成の宗教的伝統や教義とは無縁なものである——を實踐して、その果てに自我がくつがえされるような体験を持つことである。そのような内的体験によって、主体が破壊され、究極的な至高性に到達するわけである。

先生の蔵書の中に「禅」関係の本があったことを冒頭で書いたが、内的体験と禅に、西洋的・東



洋的という違いはあるものの、何か接点を見いだされているらしい。

ただし、このようなバタイユの思想・体験が、キリスト教から近代思想、ヘーゲルからニーチェまでの西洋の思想的伝統を踏まえた上で出てきたものであることに注意すべきだろう。

このように里見先生は、バタイユのいう「至高性」に関する思想すべてを「供犠」によって、説明しているわけである。



## 未来に関する無知——今を生きる

研究テーマを離れて、先生に一般的な人生観をうかがったところ、ニーチェの「私は未来に関する無知を愛する」という言葉が挙げられた。そして次のように語られた。

「人間には、予めコースを作ってそこを歩もうとする傾向があります。それはそれで結構ですが、一寸先は闇の方が、人生は一瞬一瞬が新鮮で、緊張感に満ちて面白いかもしれませんよ」

決まったコースを進んでいけば、安心感を手に入れる代わりに、生きる充実感が失われてしまうことがある。なぜならそれは「今」という時を生きるにはいいからだと、先生はいわれる。

「コースを作って生きるということは、未来の目標に到達するために、今の瞬間を犠牲にすることになります。それはひとつ間違えると、目の前に人參をぶら下げて走る馬みたいになりかねません。」

ひとつ到達すれば、その次の目標のために走るといったように、つねに未来のために生きていて、「今」を生きることができなくなるわけです。至高性は、そんなに特殊なものではなくて、我々の生きてる一瞬一瞬の中に潜んでるものなんです。スポーツでも勉強でも、何かに熱中して、充実感や喜びを感じているとき、そういう中にも充分自

覚されないとはいえ、至高の瞬間は隠されているのです」

確かにそうだと思う。良い所に就職するために勉強して、就職したら昇進のため、老後のために労働する。それはそれで良いのだけど、もっと一瞬一瞬を大事にすることも大切なのではと、先生のお話を聞いて切に感じた。



## フランス語を学ぶ意義——日本と世界と

里見先生は普段フランス語の教師として、我々東工大の学生と接しておられるわけだが、はたしてフランス語というものが理工系の学生に必要なのだろうか。現在、東工大では英語と第二外国語を合わせて学んでいるが、例えば、最新の論文などは英語にすぐに訳されて、英語さえわかれば読めるようになっている。だからはっきりいって、第二外国語などは必要ないのではないか、そういう率直な疑問を里見先生にぶつけてみた。すると先生は笑いながら「必要ないともいえるし、あるともいえます。それは人によりけりで、未来のことは、やはりわかりません」と答えられた。

ただ、現在の世界情勢を考えれば、ソ連が崩壊し、アメリカは唯一の大国になったとはいえ経済的に不安定である。だから、日本はアメリカばかりとではなく、今後統合されて大きな勢力となるECと、さらに密接な関係をつくっていく必要が出てくるだろう。ECの中心はドイツとフランスで、ドイツ語やフランス語の必要性がなくなると

は、とうてい思えないと言われる。

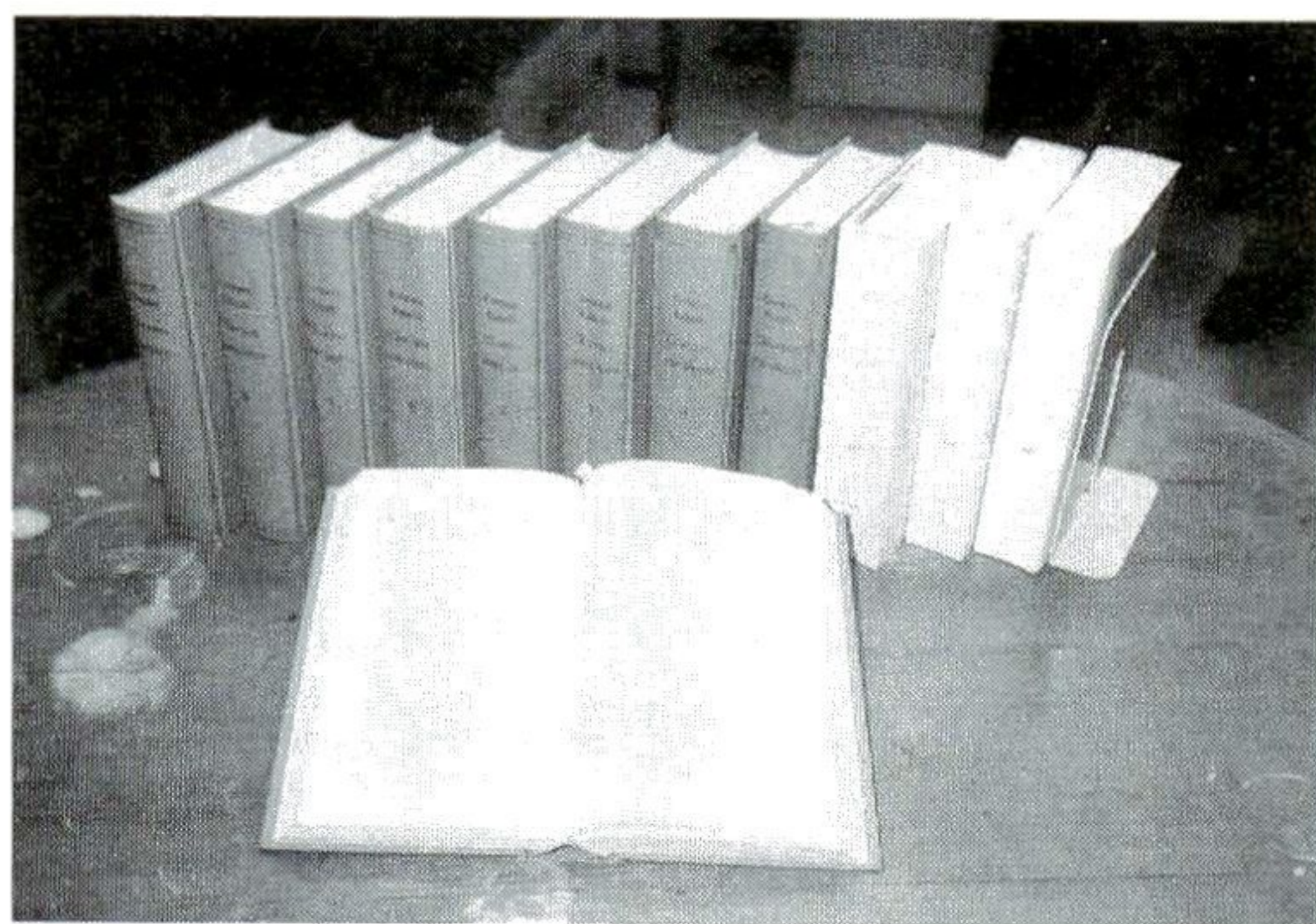
「特にフランス語は、かつての外交用語としての伝統が根強く、公用語として使っている国も多いです。とりわけアフリカなんかはフランスの植民地が多くあった関係で、フランス語が広く使われています。今のところアフリカと日本はあまり縁がないですが、将来、アフリカがクローズアップされるかもしれません。そのとき、フランス語が必要となるでしょう。アメリカだって、移民の国ですから、民族も多様なら、語学も多様です。スペイン語や中国語しか通じないアメリカ人も大勢いるわけです。だから英語だけで済むというのはひとつの錯覚にすぎません。旅行ならそれでも良いでしょうが」

フランス語の教官は東工大に現在、里見先生以外に二人おられる。その内、湯沢先生はブルーストの『失われた時を求めて』を、新任の赤間先生は、フランスの精神分析学者ジャック・ラカンをそれぞれ研究テーマにされている。

ある事象や物体を研究することと違い、一人の作家や思想家という生身の存在を相手に研究すると、相手から何かしら影響を受けずには済まないものらしい。そうでなければ良い研究はできないものなのだろう。里見先生のお話をうかがって、そんな感想を持った。

最後に、貴重な時間を割いて、我々の取材に応じて下さった里見先生に感謝の辞をここに添えたい。

(石井)



『ジョルジュ・バタイユ全集』(全12巻)